

第53回日本東洋医学会学術総会  
招待講演

## 東洋医学：21世紀への展望

黒川 清

東海大学総合医学研究所, 神奈川, 〒259-1193 伊勢原市望星台

### Traditional Medicine in 21<sup>st</sup> Century : A Perspective

Kiyoshi KUROKAWA

Director of the Institute of Medical Sciences Tokai University, Boseidai, Isehara, Kanagawa 259-1193, Japan

#### Abstract

After achieving a spectacular economic growth through 60's to 80's of the 20<sup>th</sup> Century, Japan seems to have lost its momentum and stays stagnant in the last 10 years of so-called 'a lost-decade'. What has been wrong? Here, I will discuss the historical background and the social structure of modern time Japan and their relevance to the global changes driven by information and transportation technology which affected political, economical, and social environments of the world or so-called 'globalization'. In this context, it will become clear that the mechanism that has supported the success of modern time Japan will no longer be workable in this time of 'globalization' of 21<sup>st</sup> Century and will left alone even in Asia. To avoid such perspective, radical changes in nurturing future leadership is urgently needed.

**Key words :** globalization, historical perspective, modern time Japan

#### 要旨

1960年代から80年代の目覚ましい経済成長を遂げた後、日本は何かおかしくなり、この10年は「失われた10年」と低迷している。何がおかしいのか？この講演では近代日本の歴史的背景と社会構造と、情報と交通技術の発展によってもたらされた世界の政治、経済、社会環境、すなわち、「国際化」になぜ対応できないのか。日本を成功に導いたシステムそのものが国際化時代の21世紀には機能せず、アジアでも異質となり、取り残されるであろう。このような将来展望を避けるには指導層育成の思い切った改革が緊急に必要とされる。

**キーワード：**グローバリゼーション、歴史的俯瞰、近代日本

**祖父江** 名古屋大学の祖父江でございます。それでは時間がまいりましたので、招待講演の2を始めたいと思います。今回の招待講演についてはすでにプログラムにありますように、東海大学医学部の黒川清先生をお招きして、「東洋医学：21世紀への展望」というお話を拝聴することになっております。これは今回の荻原会長さんの非常なお骨折りで、特に私がお聞きしているところによりますと、黒川先生とご同級だそうです。そういう意味で、特に黒川先生のお話を今回お聞きするという企画が組まれたというようにお聞きしているわけです。

黒川先生のことについてはご紹介するまでもなく、皆さん非常によくご存じだと思います。若干、先生のプロフィールをご紹介申し上げておきたいと思えます。先生は大変お忙しい方で、先月の終わりまで国際内科学会の会頭をおやりになっており、京都で、天皇・皇后両陛下をお招きになりまして、盛大に学

会を推進してこられたばかりです。そのお忙しい中を今日ここにまたおいでになり、招待講演を拝聴することになっているわけです。

先生は、私は非常によく存じ上げておりますが、非常なご活躍をしておられる方で、現在は、日本のみならず世界の医学・医療をリードしておられる方の中の1人ではないかと思っていますし、国際感覚の強い、豊かな国際人です。それは申すまでもなく、先生の長い外国におけるご経歴によるものであらうと思うのです。

先生は昭和37年に東京大学医学部をご卒業になってから、すぐ大学院を終えられまして、まもなくアメリカのペンシルベニア大学の方で基礎的な生化学のご勉強をされたわけです。それから、UCLA やユニバーシティ・オブ・サザンカリフォルニア、あるいはUCLA の内科教授などもご歴任になって、これは昭和44年～58年ですから約14年間、アメリカで

のご生活をされてきたわけですから。

そしてお帰りになりましたから、平成元年から東京大学の医学部第一内科の教授になっておられます。そして平成8年、東海大学の方にお移りになり、医学部長をされました。すごすご活躍をされたわけですが、お聞きするところによりますと、今年の4月から東海大学の方の総合医学研究所長を務めておられるということです。

学会活動は限りなくたくさんおありですが、先生のご専門はいろいろ幅広いのですが、特に腎臓学、それから代謝学という方向に強いご経験、ご研究のすぐれた成果をお持ちの方でございます。国際学会もいろいろ手掛けておられますし、平成11年には紫綬褒賞をご受賞になっておられます。各省庁の多くの役割をしておられますし、また、国のいろいろな重要なお仕事をしておられます。それから医療審議会の委員などもしておられまして、いろいろ医療行政、その他日本の医学に関する重要な柱になっておられる方です。今日の「東洋医学：21世紀への展望」という、非常に幅広いお話をお聞きすることを楽しみにしているわけでございます。それでは黒川先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

**黒川** 祖父江先生、ありがとうございます。先週、京都で祖父江先生とは国際内科学会でご一緒だったばかりですのに、また今日司会をしていただけということで、感謝しております。萩原会長もこういう大きな学会を仕切られまして、そろそろご退任だと思いますが、中学から一緒というご縁がありまして、おつきあいをさせていただいて、このような機会を設けていただきまして、心から感謝しております。

このようなテーマで、21世紀への展望という、いったい何が問題なのかと考えられると思います。今日はスライドなしでやろうというのは、先生方が寝ないようにしておくことも大事なのですが、私としても、先生方に直接話をしたいということがありますので、スライドなしということにしています。

### 1. 日本のリーダーの問題

21世紀とはいったい何なのか、何が20世紀と違うのかという話と、今の日本の停滞は何故あるのかということ、皆さんが知らなければいけないのではないかという話です。意外に知っているようで、知らないことがたくさんあるということです。次の会

長先生は、来年ですが「温故知新」と書いてあります。まさにそういうことであり、日本のいわゆるリーダーといわれるような政治家、行政、大学の先生、企業のトップ、いろいろな人たちがそうですが、団塊の世代のもう少し前の人たちも含めて、大体、近代日本の歴史をよく勉強していたかという、ほとんどしていません。そんなことは必要なかったからで、まず、大体现在の問題、現在のあり方は、やはり過去100年か200年のある流れの中で現在がある。ということになれば、どうしてここにあるのかという話をよく知らないリーダーたちに、国にしろ大学にしろ、研究のシステムにしろ、企業にしろ、任せておけば、ろくなことをしないに決まっています。歴史をわかっていないのですから。

つまり、大きな歴史の流れの上にあるにもかかわらず、その全体像を、みんなが見られる必要はないけれども、リーダーという人たちは見られなくてはいけないのに、そういう教育を受けていない。皆さんもそうだと思いますが、近代日本の歴史など、どこかで勉強しましたか。大学の入試程度のものではないですか。それは年号を覚える程度の話でした。日韓併合がどうして起こったのか。その背景にはどういう力のバランスがあったのか。なぜそんなことが起こらなくてはならなかったのかという話を、日本の政治家にしろ行政のトップにしろ、知っているか。知らないで、それではどうして日韓の話ができるだろうかという話も、外から見ていると情けない。

そういう歴史的な展望がない。だからどういうことにほぐせばいいかという話がわからない。韓国に行けば、福沢諭吉が1万円札の顔になっているなどということとはんでもない話だと、向こうは常識的に思うわけですが、日本のリーダーはそんなことさえわからない。そういう話で大体話をしているから、話にならない。ところで、その歴史的なビジョンの欠如は、大学に入ってから歴史を勉強する必要がなかったから、しかたがないわけで、大学に入るのに必要な勉強をしていただけた話の人たちがリーダーだということです。

2番目には、では21世紀のグローバル化とはいったい何なのか。その人たちに見えているかという、ほとんど見えていません。なぜかわかりますか。今まで日本を支えていた「官尊民卑」のカルチャーと、大企業がいいのだと思っているような

中で、しかもその中で、ぬくぬくとは言いませんが、護送船団があった。しかも、その人たちが経済成長した20世紀の後半の本当の底流には、冷戦構造があって、日米安保というものがあって、護送船団という行政とのタッグマッチがあったから、今のリーダーたちはほとんど自分で血のにじむようなディシジョンをしないで、やってこれた。だから今になって何もできない。何をしたいかわからない。

そのいい例が、皆さんは毎日見ている。例えば最近のみずほ銀行などはそうですね。みずほ銀行は、なんてばかなことをするのだろうと。あれは、日本では大した問題になってはいませんが、世界から見たらとんだお笑い者。よくあれで日本人はがまんしているなど思っているぐらいの、とんでもない話です。銀行は信用が第一なので。そして、あそこに出てくるトップの人たちの顔つきを見てご覧なさい。目はうつろでしょう。それは、ああいう横に動けないシステムで、自分の直接の上司のご機嫌を取ってそこそこやっていけば、あそこまでいったという人たちはばかりだからです。だから、いざとなったら何もできない。

行政もそうでしょう。その中でぬくぬく出世しているから、最近の外務省の問題なども、瀋陽の領事館の、テレビでライブで映されなかったら、国民は何を言われているかわかりません。みんなだまされてしまう。だけど、ああやって見せられるから、しかもその見せられたことが、日本の国民だけではなく、世界中に見られているから、みんな恥ずかしいでしょう。だけど、それがわからなかったのです。それは、「見る」ということのパワーがなかったから。

そういうことで最近、日本人が元気になっているイベントは何かといえば、去年一年中元気だったということはイチローの活躍です。それはなぜでしょう。それはライブで、テレビで見せているからです。そうすると、日本の「プロ」だといわれるような人が世界のトップの中で活躍しているのを見ることができる。それを見て、日本人も誇りに思う。この日本人が誇りに思うという気持ちを持たせるようなリーダーがいますか。そこに日本の元気のなさがありません。

国際的に見れば、だから今、短期的に見ればですが、やはり毎日のメジャーリーグのベースボールを

見て、イチローが活躍する、佐々木が活躍する。日本の国内に関するかぎりでは今、日本が元気になっているのは、もちろんワールドカップです。これはこの1カ月だけの話ですから、この1カ月は皆さんお楽しみになればいいわけです。日本人がドメスティックに元気になっているのは、阪神タイガースが勝っていることぐらいのものではないですか。要するに意外性があるということです。それがどのぐらい続くかということです。

もう1つ、意外性で去年みんなが元気になったのは、小泉さんが首相になったということです。これは、永田町の論理ではなく、何となくみんなが思っていて、4人の候補のうちで、一番若くて一番変なことを言っている人が、テレビという媒体があったからですが、何となく国民の意志を受けて、首相になったというプロセスです。従来の永田町の理論だったら他の人がなっているだろうと思ったのが、ものすごい大逆転というか、大差がついて小泉さんがなったので、みんなが期待した。期待したのだけれども、言っていることレトリックは格好いいのですが、どうも内容がないということが、去年の秋ぐらいからだんだんばれてきて、今年の1月になって田中真紀子が辞めたときに、40代、50代の女性もうヒステリックになって、これを見捨てたという格好になってきたということです。

## 2. グローバリゼーションの21世紀

そうすると、21世紀はなぜ20世紀と違うのか、これはいわゆる「グローバリゼーション」というキーワードですが、その背後にあるものは何かといえば、実を言うと、交通と情報の手段がものすごく発達したために、みんな、今まで外を見たことがなかった日本人も外国の人も、外国旅行をするようになった。するのも簡単になった。アメリカのウエストコーストまで行くのに往復で6万円ぐらいで行けますから。30年前はどうだったかというと、30年前は大学を出た人の初任給が、私も含めて月給100ドル、3万6000円程度です。外貨の持ち出しは700ドルでした。1970年はそういう時代だったのです。

今はどうですか。700ドルなんてだれでも持っているのではないですか。10万円です。簡単に行けます。だから、そのころは外国に行くのは大変だったけれども、30年たった今はだれでも行っている。この中で外国へ一度も行っていない人はいますか。そ

のぐらい、外国へ行くのがあたりまえになって、年間1800万人が外国に行っている。外国から500万人の人が来ている。ということで、日本のことをみんなが知っているし、日本のたくさんの人も外のことを何となく知っている。これがグローバリゼーションの一つのキーワードで、つまり地球が物理的に小さくなってしまった。

2番目は、情報の手段がものすごく発達した。30年前にはファクスなどありませんでしたが、いまや何かあったら、どこからでもすぐにファクスを送って、「この書類に目を通してください」と言えますね。国内だけに限ったことではありません。外国でもいい。しかもEメールもあるし、電話もプッシュボタンですぐかけられます。30年前はホテルで電話をかけようと思っても、1時間ぐらい待たされます。今はそんなことはありません。

さらに、インターネットだろうが、何でも情報を取ろうと思えば取れる。しかも今言ったようにテレビでライブで観られる。だから、イチローの活躍も「今日は打てるのかな、やれるのかな」とわくわくしている。結果がわかったものをもう一回観ても全然おもしろくない。この、ライブで見せているというところがすごいのです。今、日本にいるからワールドカップを観られるかもしれないけれども、昨日のオープニングのセネガルとフランスもずいぶん観た方がおられると思いますが、これが30年前にそんなことが可能だったでしょうか。

つまり、大部分の人が外のことも知っているということで、国民の意識が変わってくる。今までのあり方でいいのだろうかという話で、世の中の底流が変わってきました。世界中の人が同じ価値観を持つとは限らないけれども、いろいろなものを選ぶ。「もっと違うんじゃないの」ということがわかるようになってきました。それとともに、経済がグローバルにどんどん動いてきて、いまや先生方は、みずほにまだ預けている人がどのぐらいいるか知りませんが、私もみずほの前の富士銀行に口座があったのですが、すぐもうやめました。そのぐらいみんな反応します。そして、日本で一番安全だと思われているのは東京三菱銀行ですが、そこに100万円預けておいて、1年してどれだけお金がもらえると思いますか。1000円です。それでも預けているわけですか。しかもペイオフでしょう。それでも預け

ているわけですか。ペイオフの場合は1000万ですから、それ以上持っている人が考えればいい話なのです。そのぐらいの世の中になっており、だから、シティバンクに移してしまう。そのぐらい選択肢が増えているわけで、自分たちの責任で、何でもできるようになったということです。

それが21世紀なのですが、そこで20世紀の日本はどうだったかということです。ここで政治の問題などいろいろ話をするつもりは今日はないし、歴史の展望といっても、宇宙ができて150億年という話をしてもしかたがないし、地球ができて46億年という話の流れもあるし、生命ができて30億年という話もある。ホモサピエンスという我々の種が地球上に現れたのは、十萬年前です。サハラ以南のイブさんから出てきたわけで、今、ミトコンドリアDNAを分析しますから、ヨーロッパの人たちの大部分が、イブの7人の娘から出てきていることはもうわかっているのですが、そのぐらいサイエンスが進んでいます。

そういう世の中の中にいったい何が起こるのかということで、特に日本のこの東洋医学も含めたこれからのパラダイムというかチャレンジは何かということ、やはり20世紀の日本はいったい何だったのかということを考える必要があります。つまり、歴史は繰り返すし、歴史の波というのは、必ず一方的に上がっているわけではなく、波のうねりには必ず上がりもあるし、下がりもある。だけど、その大きなうねりを見るのが上に立つ人たちの責任だということです。

### 3. 日本の「常識」の「非常識」

日本はもちろん徳川になって、400年前に全国統一をされました。そして日本の人たちがあたりまえだと思っていることが、実はグローバリゼーションになると、限りなくあたりまえではないことが多いこともあります。これは価値観の問題だからしかたがないのですが、例えば3つ、日本人はほとんどしかたがないのかなと思っているのだけれども、日本以外の人には全然理解できないことがあります。その理由はなぜかということも考える必要があるわけです。今日は、そこまでは議論はしませんが。

例えば過去3年間、日本の自殺死亡者は3万3000人です。どこの国でも自殺する人はいます。でも、普段の日本の自殺者は毎年2万6000～2万7000人ぐらいです。過去3年間自殺で死ぬ人が30%増えてい

る。これは結構由々しき問題ではないですか。だけど、この30%という増加は、そのほとんどが40~50代の男性による自殺です。

つまり、仕事がなくなったからといって、自殺する人はどこの国でもいます。それから、ローンが払えなくなったと自殺する人はどこの国でもいます。しかし、ある国、ある文化の中で、30%自殺が増えて、それが全部、40代か50代の男で、家族もいて子どももいるのに、そんなことを考えられますか。これは由々しき問題です。だけど、日本人以外には、こんなことは理解できません。だから、なぜかと考えなければいけない。仕事がなくなったら、家族や子どもがいるのに、そんなに悲しくて自分の存在を否定するほどのことなのですか。そういう社会的な価値観で、我々は教育を受け、社会に存在していました。

2番目。日本には「過労死」という言葉があります。ある意味では美談かもしれない。過労死というのは、確かにそういうビヘイビアがあるけれども、よその国に行って話してご覧なさい。「なぜ、そんなばかなことをするの」と言われます。それは過労死をする人というのは、年にそれほど数が多いわけではないかもしれませんが、そういう価値観と、それが行動になること自身が、理解できない。だから、「過労死」という言葉は、そのままオックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリーに出ています。ということは、そのような言葉がない。それは、そういうビヘイビアも価値観もないからです。

だけど、それは日本では労災の問題や認定など、その程度の話になっていて、なぜそんなにまでするのかということに、社会的な疑問もあまり挟まない。これはなぜ？ つまり、日本人の価値観と人生観というのは、その程度のものでしょうか。では、いざとなったら会社は皆さんの面倒を見てくれますか。いまや弱電の日立、松下、三菱電機、NEC、東芝、富士通、みんな大体3000億~5000億の赤字を背負って、6000から1万6000人の雇用を切ろうとしています。だけど、そこの社長も会長も1人も辞めようとしていないのは、いったいどうしてですか。それなのに、そんな過労死するほど働きたいわけですか。会社なんかそんな面倒を見てくれるわけがないのに、そういう幻想にとらわれている。そこに問題があります。なぜそんなことをするのか。

つまり日本には、今までのカルチャーに個人というものが存在していないのです。つまり、ある共同体に入る。その共同体の中で動けない。医者が悪いのは医局制度で教授が何とかかんとかと、医局制度のことを悪く言う人もいますが、とんでもない。三菱銀行に10年働いていて、住友に行けますか。朝日新聞に10年勤めて、読売に行けますか。どこでも同じではないか。それは根本的に日本社会に共通の問題なので、大学の医局制度だけ取り上げて言われても、とんでもない話なのです。日本の社会制度自身がおかしいのです。そういうことが、なかなかわかっていない。

3番目に、日本人には比較的あたりまえで、まあしかたがないかというところがあるのですが、外から見ると全然理解できない3つ目のこと。日本には、新聞でもしょっちゅう皆さん見っていますが、「天下り」という言葉があります。「天下り」というのは、新聞でわざわざかっこ書きにして「天下り」と書いてくれば、これは異常なことなのだということがみんなわかりますが、普通の新聞、一番発行部数が多いY新聞でさえ、「天下りの数」とか何とかと書きますが、かっこ付きではない。ということは、その言葉が当たり前として定着している。「天下り」というのは、英語に直せば“descent from Heaven”です。なぜ役人は自分たちより上だと思っているのですか。こんなサイコロジーがある国民なんて、先進国では見たことがない。役人をありがたがっている。そういうビヘイビアと価値観によって、国ができています。おかしいと思いませんか。だから、近代文明化した西洋社会の中に行けば、やはり役人、官僚といえ、bureaucrats, public servantsです。「市民」であれば決して自分たちの上だなんて思っていない。

それぞれの国のエリートといわれるような人たち、つまりオックスフォードやケンブリッジ、ハーバード、エール、プリンストンなどに行く人たちは、一応その国なり社会のエリートといわれるような人たちです。その人たち、ケンブリッジやオックスフォード、スタンフォード、ハーバード、MITなどへ行った人が、国家公務員になろうなんて思いませんか。だけど、日本ではいい大学へ行った人が、なぜ国家公務員になろうと思っているのですか。それは天へ一歩上るからだと思っているのではないですか。それがあたりまえだと思っている日本人自身に問題

がある。なぜかという、「いい学校に行きなさい」といって、お母さんが一生懸命、受験勉強をさせる。そして文系に行ったら一生懸命、公務員試験を受けていいところへ入れれば安心だなどと、情けないと思いませんか。これが日本の常識なのです。これが、21世紀に通用するかということなのです。

もう一つの例が、日本ではいい大学は国立大学だと思っている官尊民卑のこのカルチャー。どうして？ 開発途上国にはお金が十分ないのだから、人材の育成ということで、国立の大学は大事です。だけど、経済成長してしまった今の日本で、どうしてそんなものがあるのですか。イギリスやアメリカなど、もちろん教育は大事だから国がお金を出す。だけど、国立大学などがあり、それをありがたがっているなんて、G7で日本とフランスだけ。しかもそれがありがたいと思っているのも、日本人とフランス人だけです。

つまり、官僚が強い。それは、一つのその国民の価値観ですからしかたがないのですが、それで今になって独立行政法人などいろいろ言っていますけれども、大体そういう価値観である日本人に問題があるということ。つまり、役人が悪いわけではなく、そういうものを作っている日本人が、それがあたりまえだと思っていたところに問題があるわけで、外から見るとこれはおかしい。だけど、それに気がつかないところに、日本の課題があるのです。

#### 4. 医学の進歩

今日は、東洋医学という話ですから、この医学とはいったい何かということ、人間はもともと病気で死にたくない。特に自分の子どもたちを若いときに失いたくないというのは、人間と動物の違いです。もちろん、動物でも子どもは守りますが、子どもが死んでしまってから1年たって2年たって、それを思い出して涙をするなどというのは、人間の特徴です。それは、やはり人間が進んだせい。人間とサルとの遺伝子は1.3%しか変わらないにもかかわらず、人間はものすごく違う。知的な好奇心がある。何かそれについて対策を立てようとする。ということで、動物ももちろん気分が悪いと下痢をしたりして、草の葉をなめたりしているネコもイヌもいます。人間でもそうです。アスピリンなどはヒポクラテスのときから使っています。だけど、その成分を分析して合成して、アスピリンが使われるというのは、これは

やはり人間の知恵で、なめていた草がアスピリンのもとだった。ジギタリスもそうです。これが生薬とか東洋医学という、長い人間の歴史の知恵となって出てきているわけですが、そこから新しいものが出てくるというのが、また人間のすばらしいところだということになります。

人間が一番恐れていたのは何かということ、19世紀の終わりまでは、ばたばた人間を殺している感染症です。特に15世紀のヨーロッパでは、わずか5年の間にペストで3分の1の人が死んでしまいました。子どもがペストになると親も逃げるといぐらいに、恐い病気です。そのペスト菌はどうもペストも中国から行ったらしいのです。中国からヨーロッパに行ったのは、もちろんアラブの人たちが中近東を支配して、8～15世紀ぐらい、正式に言えば1492年のトレドからグラナダの戦いという話があるわけですが、そこまではアラブが大体、中近東をずっと支配して、西と東をつないでいました。だから、紙というのはアラブによってヨーロッパに紹介されて、聖書がものすごく売れて、広がっていくわけです。その中にいろいろな知識があって、非常に進んだ中国の文化が、西の方に伝えられました。これはアラブの世界のおかげです。中国でいろいろなものがあつたのが、おそらくジギタリスや何かもそうではないかという気がします。そういうことがあり、そのあと感染症でペストやいろいろなことがありました。

そして何が起こったかということ、おそらく皆さんご存じのように、1796年、ジェンナーが自分の子どもに牛痘を打って、人間が天然痘にならないのだという接種をするわけです。みんなばたばた死んでいて、死亡率が30～40%ですから、いまや天然痘はなくなったとWHOが10年ぐらい前に宣言したわけです。またこれが天然痘ストライクス・バックということで、バイオ・テロリズムのツールになり始めたという時代になるわけです。

そうやって、医学がどんどん進歩してきました。19世紀の終わりを見ていると、ペスト菌を初めて見つけたのは北里柴三郎です。それと同じときに、ほぼ数日の間で論文を書いているのですが、エルサンという人と2人が、全く別々に見つけているわけです。そのときに、香港でペストのものすごい大流行があり、そのサンプルで北里柴三郎などが見つけているのです。北里柴三郎の論文が少しはっきり書い

ていなかったり、少しミスリーディングなところがあって、最終的にペストの菌はエルシニア・ペステイストと、エルサンの名前を付けられるわけです。しかし、そのぐらい日本人たちもたくさん貢献していて、20世紀に入るまでには、例えばジフテリアや破傷風、ペストの菌、結核菌もそうですが、マラリアなど、いろいろなものが発見されています。

たまたま思い出すのにいいのは、ノーベル賞というものが1901年から始まっていることです。去年、ノーベル賞の100周年があったのですが、そのノーベル賞の100周年を振り返ってみると、どういう人がもらっていたかということで、どういうことが画期的な成果として評価されてきたのかということがよくわかります。

そのように見てみると、最初のノーベル賞の医学生理学の受賞者はエーリッヒであり、ジフテリアの発見と血清療法ということです。実はこれは北里柴三郎と一緒にやった仕事なので、北里柴三郎ももらっていたのではないかと、日本人はすぐに思ってしまいます。しかし、あのころのヨーロッパにしてみれば、「日本っていったい何だ」というくらい、存在のない国です。これはしかたがない。だから今でもやはり、日本に来たどこかの留学生と一緒に某教授が何かを見つけたとして、開発途上国の小さな国から来た一生懸命仕事をするフェローに、一緒にクレジットをやるかなというのと、これもまたなかなか難しい問題かなという気もしなくもないのです。別に今になって北里柴三郎が受けなかったのはフェアではないといわれても、これは何とも言いようがない。そのときの歴史的な背景もあります。そのあとマラリアを見つけたとか、コッホもそうですが、結核菌を見つけた、あるいはその治療を見つけたというのが、最初の方のノーベル賞の受賞者がずらずらと並んでいて、いかに人間が感染症に苦勞したかということがわかります。

そのあとに、感染症の治療としてのペニシリンが見つかる、初めての結核に対しての薬であるストレプトマイシンが見つかる。そういう見つけて製造していった人がノーベル賞をもらっていますし、さらに、高峰讓吉がアドレナリンを1900年に見つけるわけですが、そうやってホルモンなどの存在がわかってきた。だから人間はそういう意味では、いかに自分たちの命を守りながら、よりよい生活を求めよう

という知恵と苦勞と、それが科学の発展を引っ張っていったという面があります。

## 5. 20世紀の特徴

20世紀は、ものすごい勢いでサイエンスが爆発した。それはすばらしいことだと思いますが、もう1つ20世紀の特徴は何かと言われれば、これは20世紀の間中皆さんにかかわっていた世界戦争がずっと続いていた世紀です。要するに第1次世界大戦、第2次世界大戦。第2次大戦は日本も参加してひどい目にあったわけですが、そのあとは冷戦という構造が1989年にベルリンの壁が落ちるまでずっとあった。20世紀のほとんど大部分は、国と国との戦争ではなく、世界中が戦争に何らかの格好で巻き込まれていました。だからこそ日本は冷戦のフロントとして、朝鮮半島の朝鮮戦争があり、朝鮮特需があって、それで日本は経済復興をできたわけです。冷戦構造があるからこそ日米安保条約があり、日本はどんどんものを作ればアメリカが買ってくれるよということで、経済復興してここまで来ました。

だから、日本の人は確かに働いたのですが、この50年の日本の経済成長をリードしたような人たちは、何もその人たちが非常にイノベティブだったわけではなく、1990年バブルが弾けてしばらくまで、みんな言っていたでしょう。「日本は政・産・官の鉄のトライアングル」と。私はそのとき書きました。アメリカに長くいて帰ってきてみると、実に不思議だと。「政・産・官のトライアングル」などと威張っているけれども、「学」という言葉がそこにはない世界は異常だということを書いたことがあります。

しかし、最近になって何とっていると思いますか。最近になって、「産・官・学の連携」などと言っているでしょう。今になって「学」などおだてても、だめです。それは第1次科学技術基本法で、5年間で17兆などというお金を国から研究にどんどん投資するから、産業界は能力がなくなってしまい、「お願いしますよ」といって、「産・官・学の連携」などと言っているだけの話です。今の企業、特に大企業のリーダーたちは、実にみつともない人が多いのです。

そうやって何でもお上に陳情しようというのがとんでもない話で、マイケル・ポーターの『日本の企業戦略』などを見ればよくわかるように、先程名前を出して悪かったのですが、例えば日立も東芝も

んな同じことをやって、その中で競争しているだけです。困るとお上に「何とかしてちょうだい」と。もう、お上も「今さら何もできないや」という感じになってきてしまったということで、昨日ムーディーズの発表によると、日本はいよいよAランクということで、G7では圧倒的なピラのポジションに評価されてしまいました。そして評価されると、また「けしからん」などと言って、黒田財務官がムーディーズに抗議の文書を送ったり、塩川財務大臣がインタビューを受けたりすると、いろいろなことを言ってます。しかし、そういうことが世界中にテレビで流れてしまっています。「あいつ何言ってんだろう」などとみんな思われています。「何だ、ほけてるのちがうか」と、このように言われてしまうわけで、これがグローバリゼーションの怖いところだということです。

## 6. 明治維新の特徴

そこで日本の歴史を振り返って、いったい何が問題なのかということです。明治時代には、そういう新しい時代をつくらうという立派な人がたくさんいました。今はおそらく明治時代に入る前の、徳川幕府の最後の10年間に似ているのではないかと。なぜかと言うと、徳川幕府の最後の10年ぐらひは、大老・家老が集まって、江戸城で評定会議をしています。だけど何が問題かよくわからず、よく決められないで、「殿、いかがいたしましょう」と言っているうちに世の中がどんどん変わってしまう。最終的に明治維新になってひっくり返ったとたんに何が起こったと思いますか。もちろん、そのときの新しいリーダーは、坂本竜馬にしろ伊藤博文にしろそうですが、みんな30前後です。その人たちに基本的な理念を与えたのが、吉田松蔭です。

吉田松蔭は29歳で死んでいます。吉田松蔭は、最後の1年間は牢獄につながれているし、その前も牢獄につながれていますから、吉田松蔭が松下村塾などを開いていたのは、1年ちょっとぐらひ、せいぜい2年ぐらひです。その中に伊藤博文など、その吉田松蔭の教えを受けて、やはり「ああ、このようにしなければいけないのだ」ということを感じた次の世代の人たちがいて、明治維新が起きて、いろいろな政策が行われるわけです。たった三十数年で日露戦争に勝って、世界のG5になるぐらひの可能性があるので。今はまさに同じことで、あのままの徳

川幕府の大老がいろいろなことをやっていると、何も変わらないのと同じで、今の日本では何も変わらない。たぶんそのようになりますから、どうしたらいいか、何をすべきかということになってくるわけです。

つまり、日露戦争に勝つまでは、日本は必死だったわけです。日本は植民地になるかもしれない。あのころは帝国主義で、みんな陣取り合戦をしているわけですから、その中で朝鮮半島の李王朝をどうやって独立させるか、どうやって日本と同じように工業国家にするか。朝鮮半島が列強の植民地になれば、日本はあつという間に取られることはもう目に見えていたので、それで伊藤博文などがいろいろなことをする。福沢諭吉もするわけですが、朝鮮半島の将来のリーダーをたくさん呼んできて、慶応義塾などいろいろなところに人を呼んで、教育するわけです。それが裏目に出るといふか恨まれてしまい、伊藤博文は、最終的には朝鮮半島で暗殺されます。それはお互いにポリティカルな違いがあるわけですから、しかたがないのです。

しかし、いまやグローバリゼーションで、世の中にどんどん情報が開かれているときに、日本はいったい何をすべきかということ、やはりはっきりと世界にもアピールすべきだし、日本のリーダーは日本人たちにもわかるように言わなくてははいけません。そういう役割をできる人がいるのだろうかというところに、問題があるのです。

## 7. 日本の医療の課題

もちろん、20世紀の後半のメディカルな部分は、ゲノムからタンパク、20世紀最後の年の2000年に、ヒトゲノムの塩基配列が読まれたというぐらひに、ものすごい勢いで進んできました。ですから、生殖医療にしろクローンにしろ、いろいろな問題が日本の中だけの論理で解決されるわけではないのですが、いろいろなことが出てきます。しかも、そうやってどんどんみんなの寿命が長くなってきて、多くの病気がある程度克服されてきて、何が起こってきたかという医療の問題。国民健康保険、皆保険が昭和36年に入ったときの死因の第一は、脳溢血と結核です。脳溢血だって、降圧剤などはろくなものがないのですから。だけど、いまや血圧の薬もいいものができ、結核も、また少し増えていますが、どんどん減りました。



いまやみんなが長生きをするようになり、高齢化。そして長生きをすればいろいろな病気が出てきます。ボケなどいろいろなことも起こるし、生活習慣病ということになってきて、それによる血管疾患が一番多くなり、日本の毎年90万死ぬうちの3分の1は癌で死ぬ、残りの3分の1が脳心臓血管障害という血管の病気で死ぬ、残りの3分の1はその他の理由で亡くなるということです。生活習慣病は血管の病気が進むわけです。

生活習慣病は何かといえば、糖尿病や肥満、動脈硬化、高血圧などですが、しかし、これはみんな生活の習慣を変えればいわけです。変えるような方策についてのいろいろな教育やインセンティブがないかぎり、医療費はどんどん増えるばかりです。あたりまえですね。糖尿病と言われてすぐに死ぬわけではありません。だけど、糖尿病と言われて「運動しなさい」「食事をしなさい」「体重を減らしなさい」、いろいろなことを言われていて、10年放っておいて、たばこは吸うは、好きなものは飲み食いするは、毎晩酒を飲みに行くは、それで脳溢血になって、みんなが貯めた医療費を使ってしまえなんて、とんでもないと思いませんか。日本に糖尿病の患者さんは、50年前には10万人しかいなかったのです。いまや700万人。どうして？これが遺伝子だと思えますか。違うでしょう。だって、いまや自分で洗濯をする人なんて何人いますか。電車や何かに乗らない人なんて、どのぐらいいますか。みんなタクシーに乗ったりエレベーターに乗ったり、楽なことばかりしているではないですか。それで、どうして1日3回もご飯を食べるのですか。その方がよほどおかしいではないですか。

つまり、使うエネルギーがどんどん減ってきているにもかかわらず、相変わらず取っているエネルギーは同じか増えている。それで「さあ、糖尿病を制圧しよう」とか、「糖尿病の研究は大事だ」とか。肥満なんかどうですか。知的レベルに関係なく、どうすればいいか、みんなわかっているわけでしょう。だけど減量できない。医療費の自己負担を2割から3割にするのはとんでもないなんて、そちらの方がよほどとんでもないわけです。病気によっては、自己負担をもっと増やしてもいいでしょう。どうして病院に行って、アリナミンまで保険でカバーしてくれなどと、そんなビタミン不足が今、あるのですか。

つまり、自分の体には自分でもっと責任を持ってコントロールできるような病気が多くなってきました。にもかかわらず、昭和36年と同じような健康保険の体制でいいのかということなのです。

いろいろな情報もあるので、東洋医学もいいのではないか。それはいいのです。それはいいのですが、東洋医学の問題は、おそらく先程言ったように、アスピリンもそうだしジギタリスもそうだし、人間の叡智で、昔はそういうものであって、やはり健康でいたいということで、たくさんものを見つけています。だけど、それを、分析するのも一つの知恵です。クオリティ・コントロールができるから。そして、そういう生薬がまた、いろいろなものが混ざっているのだから、いいのだとおっしゃる方もいますが、しかし、混ざっているために、ほかのものも混ざっているといけないということもある。アメリカなどでも今、生薬の方はかなり人気があり、結構いろいろなマーケットでお金を使うから、皆さんが買うから、パブリック・ヘルス・イシューとしては、どうやってクオリティ・コントロールをするかが問題だということ、かなり今、調査をされています。やはりその辺をするのは、先生方を含めた、東洋医学にかかわっている人たちの社会的責任だろうと思います。いかに品質をコントロールするか。

そうすると、「いや、これは生薬だから、多少のばらつきはしかたがない」とか、できない理由ばかり100も200も言います。それは役人の言い訳と同じです。それをどのようにしてやるかというところにイノベーションがあるわけで、そこに新しいビジネスの展開があるということを知るべきなのではないかと思えます。できないことは聞きたくないのです。慶応義塾に行かれた人は『学問のすすめ』などをみんな読んでいると思います。あれを読んでも、また非常におもしろく、福沢諭吉というのは偉い人だと思うのですが、あれは明治の5～7年ぐらいにわたっての、福沢諭吉先生のいろいろな講義を書いてあります。

## 8. 「お上」だけの日本人

一番しょっぱなに「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と、すごいことを言うなと思いますが、その第4講話ぐらいに書いてあります。明治6年ぐらいの話ですから、日本は新しく近代化になり、行政のやり方、政府のやり方など、いろいろ

なことを変えてくるわけです。何でもヨーロッパに倣ってやるのはしかたがない。そして近代学問も医学も、みんな西洋になって倣っていくのもしかたがない。けれども、学問をやる人というのは、普通の商売をやっている人や官僚などと違って、真実をある程度追究する人たちが、学問の分野でさえも何でも「官」がいいのだとあって、官へ官へとなびくというのは、実に嘆かわしいということを書いておられます。

それが今の国立大学の、独立行政法人化もそうですが、相変わらず官尊民卑のカルチャーというのは変っていない。福沢先生は偉い人と思うのですが、140年たっても、日本人というのは全然変わっていないなど。何でもお上頼みだなど。そして、お上のものがありがたいと思っている、このメンタリティを打破する。一人一人がやはり社会の一員として、例えば医師であり薬剤師であり、それぞれにかかわるプロフェッショナル・コミュニティが、お上に陳情するわけではなく、むしろ社会に対してアカウントブルな品質管理をし、自分たちで自分たちの品質コントロールをちゃんとし、社会に対してそれを保障しましょう。そういう話をすべきなのに、常にやはりお上に「これを認めてちょうだい」と。

先程の薬学教育の何とかということ、文部省と厚生省とで何か調整をしてこれを認定すると、ありがたいやと思っているなどということも、実に情けないなと思いませんか。それが大学改革の今のあり方です。そのように、いかに自分たちが独立した個人の一つの団体としてのプロフェッショナル・コミュニティを、これから形成していくかということが、日本に今、非常に大事な役割となっているのではないかと思います。

そこで、これからの変化は何か。今まで日本は「失われた10年」と、いろいろなことをしています。いわゆるグローバリゼーションの正体は、先程言ったように情報と交通の手段がものすごく進んだことによって、情報については、好むと好まざるとにかかわらず、国境を越えてだれのところにでもそれが届いています。そして、インターネットなどを使えば、どんな情報でも取ろうと思えば取れます。そういう世の中であって、今までの社会を形成し、それぞれのコミュニティでのリーダーになっているような人たち、あるいは行政の人たち、政治のリーダー

の人たちは、いったいどういう役割をするのかということが今、問われています。

しかもそれを問うているのは、日本国民だけではありません。特に日本は世界のGDPで2番目に大きく、500兆です。アメリカが1000兆で日本が500兆、日本の次がドイツで250兆ですから、もう圧倒的に大きなGDPでもたもたされている。世界中がグローバル経済なので、日本に対してプレッシャーがあるのですが、日本の方は何だかわからないような顔をしているので、みんな困っている。それでムーディーズなどのあいう格付けもあるわけですが、それは違うと言ってみるのもいいのです。けれども、少なくともトヨタにしるソニーにしるキャノンにしる、ムーディーズなどは、いい会社の格付けは、国よりはるかに上に格付けしています。国全体の格付けというのは、特に政府について執行能力がないということで、格付けをされているわけです。その辺を、いちいちがたがた言われても困るのですが、そのようなことなので、これから日本はどうするか。

教育の改革が盛んにいわれています。教育の改革でも、皆さん文部省が去年突然「研究大学トップ30」などというものをやるというので、みんなまた大騒ぎをしましたが、あれもおかしな話だと思いませんか。だって去年からインディレクト・コストなどと、またアメリカのまねをして間接経費などが出てきたので、いいグラントをもらおうと、その額の30%がまた大学へ行くようになっていたので、それをどんどんプロモートすればいいわけです。にもかかわらず、突然、文部省はトップ30を出す。となると、みんな「うちも入らないと、やはり何とかかかとか」といって、いろいろやるではないですか。

だから去年の暮れに文部省が、私に「何かコメントはありませんか」と言うから、言ったのです。文部省はこの10年間、昔の帝国大学のヒエラルキーをまた回復するためというわけではないのですが、大学院部局化とあって、旧帝国大学をみんな大学院部局化して、そうなる公費などの予算付けが多くなってきます。そのほかに、さらにその次に出てきた千葉、金沢など、いろいろな大学を大学院部局化して、ちょうど1サイクル終わったところではないですか。終わったところに、今度、間接経費を入れて、いい仕事をしている人には、国から大学に直接お金が入るようになります。そこで今度のトップ30な

ども、小泉さんに遠山大臣が呼ばれて「何かしなくちゃだめだよ」と怒られたから、突然出てきたアイデアだという話なのですが、そんなことはいったん言ってしまうと、官僚はもちろん引っ込められませんので、何とかしてこれを死守しようとするわけです。研究のトップの30大学でいろいろ出す。今まで大学院部局化でハンディを付けてきたわけではないですか。ハンディを付けておいて、さあ公平に評価してトップ30にしますよなんて、こんなばかな話があるかという話をしました。

これはたとえて言えば、プロゴルファーにハンディキャップを与えて、アマチュアとゴルフの試合をさせているようなもので、それで「勝った、勝った」と言っているプロゴルファーは、海外に出たときにろくなものにはならない。そのようなことと同じことをやっているのだという話をしました。国の将来を見ると、そういうことをしてはいけません。

何をするかという、例えば外国を見てみると、アメリカなどでも1950年代から60年代にかけて公民権運動というものがありました。つまりマイノリティで、黒人やメキシカンなど、いろいろな人たち、ソシアルクラスが低くてインカムが低くてという話が、アメリカの足を引っ張りかねない。それで公民権運動が出て、マーティン・ルーサー・キングやロバート・ケネディの暗殺など、いろいろなことが起こりましたね。あの時代にアメリカに行った方は、1960年代のまだ半ばですから、昭和30~40年ぐらいですが、特に南部では、黒人と白人はバスに乗っても違うところに乗る。レストランに行っても違うところというぐらい、差別をされていたわけです。

だけど、そういうことをしていると、国の力がだんだん弱ってしまうのではないかということで、何をしたか。1970年代、アメリカの教育。アフーマティブ・アクションというものを入れたわけです。そして一流の大学といわれるような大学、ハーバードもUCLAもカリフォルニア大学のバークレー校もそうですが、そういうところは、マイノリティの子どもは行けない。なぜかといえば、彼らは頭が悪いからではなく、そういう低いソシオエコノミックのクラスにいれば、当然住んでいる環境もよくないかもしれないし、ドロップアウトも多いかもしれないし、義務教育も十分にしないで、やはりだんだん

と心がすさんでくるし、ということになります。そうすると、大学まで行ける子はどうしても少なくなるわけで、もともとの能力ではありません。

ということで、アフーマティブ・アクションを入れて、そういう大学はあるパーセンテージ必ずマイノリティを入れなさいということ、大学が積極的にしたわけです。そうしたために、そういうリーダーが、10年、20年たってだんだん育ってきて、今、何が起こっていますか。今、ブッシュの政権でも、例えば国際関係の戦略のアドバイザーはコンドリーザ・ライスというスタンフォード大学の教授ですが、黒人の女性でしょう。まだ40歳になっていないのではないかと思うのですが。特に極東の政策については彼女が仕切っているし、それからコリン・パウエルもそうでしょう。国防長官になっています。そういう人材ができてきて、国全体としての活力が出てくる。

そういう政策を今出さなくてはならないのに、官尊民卑をますます助長するような政策など、絶対反対だと私は言っています。言っているだけではなく、しょっちゅう書いていますので、またいろいろなところを読んでいただければと思います。

## 9. 日本を変える

つまり今までの日本の価値観で動いているのでは、これから変わりようがありません。だから私はある意味では、今は明治維新の10年ぐらい前の江戸末期と同じなのではないかということを行っています。それでは、何をしたらいいかという、一般に3つの方策があるといわれます。これはトーマス・フリードマンというニューヨーク・タイムズの記者ですが、『レクサスとオリーブの木』という本を書いていますので、もしお時間があったら読んでいただければと思います。グローバリゼーションとは何かということですが、1つは革命(レボリューション)です。日本では当分そんなことは起こりません。たぶん失業率が20%を超えれば起こるかもしれませんが、起こりそうもない。

2番目はエボリューション(進化)です。これは時間がかかりすぎて、たぶん日本は取り残されてしまっただめになってしまいます。3番目は「グローバリゼーション」と彼は言っています。つまり、いろいろなところと国際的に混ざってしまうことです。これが今、起こりつつあります。

例えば、教育の改革。ゆとり教育などいろいろなことを言っていますが、今、世界の人口の6割を占めている、アジアにいる人たちの次の世代の若者は、何を目指していますか。もちろんやる気のある人たちの話です。もちろん100人いたら、やる気があって黙っていてもがんがんやるぞという人は1人か2人、必ずいます。大部分の人は普通の人ですから、「そうだよ」と言えば、一緒になってやる人たちです。そのようになっているのが、人間の能力のディスクリプションです。そして、アジアのやる気満々の人たちは何をしようかと思っているかということ、みんなアメリカの大学に行こうと思っています。そのための勉強をしています。そして、向こうへ行ってみようという人たちのチャンスをどんどん広げようと思っています。

それでは、日本の中学生や高校生はどうでしょうか。やはりまだ東大へ行きたいわけですか。ところが、最近変わってきています。いわゆる有名な進学校のトップの数パーセントを占めるような人たちの中には、「日本の大学には行きたくない。どうやってアメリカの大学に行ったらいいのでしょうか、行けますか」ということを聞いている人が増えてきました。これは非常にいいサインだと思います。つまり、そういう人たちは、世界の次のリーダーの人たちと混ざり合い、その人たちと価値観を分け合い、その人たちのネットワークが出てくるからです。

この動きは早めた方がいいと思いますが、例えば私はたまたま10年ぐらい前にハーバード大学の卒業式へ行ってみると、1600人がカレッジを卒業するのですが、そのうちの30%は、だれが見ても東洋人、つまりオリエンタルの名前です。ファンさんとかキムさん、リャンさん、リムさんなど、そういう名前です。もちろんその人たちは2世、3世、4世もいるし、新しく来た人もいます。30%です。バークレーなどのウエストコーストへ行くと、もっとこのパーセンテージが増えてきます。たまたまそのハーバード大学の1600人のうち30%がそうで、もちろんシンさんとかインド人など、もう少しオリエンタルではないアジアも入れたら、もっと増えてきます。その1600人のうち、日本人のファミリー・ネームを持っている人はたった5人でした。寂しいと思いませんか。だからその人たちが、グローバルな世の中になってくると、自分たちの故郷を思い、

自分たちのヘリテージを思い、自分たちの親せきをまた呼んであげようと思ひ、そして、そういう人たちが自分たちの国へ帰り、また次のリーダーになっていく。そういう価値観をシェアする。これが将来のアジアに向かってくる、アジアのリーダーたちのリーダーシップの価値観の座標軸になっています。

つまり、自分たちのヘリテージも知っているのだけれども、世界を動かしている価値観もわかっているという人たちが、どんどん出てきています。北京大学の副学長などは、スタンフォードに10年もいた若い人を、ばんと引っ張ってきて副学長にしています。なぜ？ だけど東大がそんなことをすると思ひますか。日本はアジアとも全くずれてしまっています。というわけでアジアのリーダーはアメリカなどと、どんどんやっている。日本は完全にパッシングではありませんが、最近では「日本はどうでしょう」と、この間いろいろなビジネスや何かのリーダーと、いわゆるダボス会議へ行ってみて話をしたのです。「これははっきり言えないのですが、日本はGDPの第2位なのですけれども、もう日本は何をしても変わらないから、日本はそういう話し相手にしてもしかたがないという雰囲気がだんだん出てきている」ということを言われました。

これは非常に危険なことです。やはり我々の世代はともかくとして、日本の将来を担っていく、皆さんの子どもさん、お孫さん、その先の世代にどういう日本を残すつもりですか。我々の世代も過去の世代なのです。だからこそ明治維新のときのように、将来の日本を背負っていく人たちを、1人でも多く育てて、そういう人たちを輩出することこそが、我々の世代の責任ではないかと思ひます。

つまりこの間、文部省の学術振興会の「学術月報」の平成14年1月号にも、私は「日本のリーダーたちはすべて過去の人である」と書きました。「過去の人たちの責任は将来の人達へ道を開くことだ」と書いてありますが、そういうことなのではないでしょうか。だからこの間も「それでは具体的にどうしたらいいでしょう」と言うから、それは具体的にはやはり明治維新のときと同じように（別にお年寄りがいなくなる必要はなくて、大事な、いろいろなウィズダムがありますから、いるのはいいのですが）、責任あるポジションはみんな40前後の人にさせなさいと。それが、日本を生き返らせる唯一の可能性で

はないか。

つまり、今いるリーダーたちはみんな過去の人で、将来がない人が日本の将来のことを考えているから、ろくなことがないのです。40とか30才台の人にやらせれば、彼らは将来がかかっているから、もっと真剣にやります。それが明治維新に起こったことではないですか。だから、日本も捨てたものではありません。だけど、過去の成功体験があたりまえだと思っていて、将来のない60代、70代の人たちが、責任あるポジションにいて考えていけば、ろくなことはないのではないかと、私は言っています。

### 10. 「出る杭」を増やす

来年のこの学会も温故知新、これはすごく大事なことだろうと思います。歴史は繰り返す。人間の考えていることは、それほど変わるはずはないのですから。という話で、来年の学会も非常に楽しみだと思えますが、特にやはり私は若い世代に、失敗してもいい、若いときにいろいろたくさんものを見せたい。それによって、本人たちが何をしたいのかということを見せたいわけで、その一番いい例が、毎日皆さんが見ているBSでのメジャーリーグです。

これは、実際は7年前に野茂というとんでもない人が、年俸1億3000万という最高給を持っていながら、「メジャーで投げるのが私の夢だ」と言って、すべての日本の「しきたり」をキャンセルして向こうに行ってしまった。つてもなく行ったわけです。だけど、野茂がそれを20年前にやっても、同じようなインパクトはありませんでした。なぜかと言えば、野茂が投げるゲームを、テレビで、ライブでみんなが観られるようになったという技術が今はあるからです。それを観て、日本人はみんな「野茂、結構頑張ってるな」「メジャーは違うな」と思ったではないですか。だけど、それを見て本当に評価できる人は、プロ野球の選手です。それを見て「俺もやろう」と思って行った人たちが、吉井がいて長谷川がおり、伊良部がいて、それによって観る機会がどんどん増えてきた。それを見て佐々木が行った。それを見て、またイチローが行った。

これは非常に教訓的なことですが、情報化社会というのは、はっきりそのようにみんなに見えている。だけども見えることの意味はまだわからないことが多いです。野球のように簡単なものならすぐわかります。だけど、これは日本に教訓的なことがいくつ

かあって、野茂のようなチャレンジャーをみんなに見せている。それを評価するのはパブリック。本当に評価できるのはプロ野球の選手。そして佐々木も行って、この間、奥さんと離婚するといつて10億円もらっているのだという話がわかったわけですが、つまり、あとで行く人はより安定した生活で行けるようになりました。それはあくまでも野茂という人がいたからです。野茂に代えられるほどの価値をつけた人はいません。だけど、その価値をみんなに見せたのは、テレビで、ライブで見せるという技術があったからです。そしてイチローも活躍してみんながいい気分になった。そこでいったい何が起こったかということです。

つまり今、大きな会社が大変、大変と言います。これを見て一つ大事なことは、まだ読売ジャイアンツの選手は1人も行っていません。なぜ？それが日本のあり方の元気の無い一つの理由だろうと思います。読売ジャイアンツの選手も、いろいろなところで、プライベートなところで、「あなたはどうして行かないの」と聞くと、「いや、それは野茂さんや佐々木さんやイチローさんは特別なんだよ。あの連中はやっぱすごかったからね」とたぶん言っています。だけど、彼らが言い訳をしにくくなってしまったのは、新庄がそこそこ活躍してしまったことです。新庄が活躍してしまったので、この言い訳が通用しなくなりつつあります。もっとたくさん人が行き出して、やはり何が起こったかという、読売ジャイアンツの試合のテレビ視聴率が、だんだん下がってきました。東京では4チャンネルでしか観られなかったのですが、今年からいよいよNHKでも読売ジャイアンツの放送をするようになりました。それは、独占でやるほど価値がなくなってしまったということで、読売も商売で必死になっているということです。

このような情報化時代に、我々一人一人が何をし得られるのか。パブリックに何をできるのか。それから次の世代に何ができるのかが、大事なキーポイントではないかと思えます。非常に雑ばくな話をさせていただきましたが、温故知新というのは、やはりそういう意味では、私は明治維新に倣うことはたくさんあると。だからこそ司馬遼太郎は、明治維新のあとに出てきた、たくさん人のことを書いています。けれども、『坂の上の雲』の秋山兄弟以

降は、司馬遼太郎は1人も人物について取り上げた本を書いていません。なぜでしょう。それは司馬遼太郎は、その後いろいろな人のことを書こうと思って調べれば調べるほど、後世に残すほどの偉大な人がいないことがわかったからです。

つまり、そういうところになれば、必ずリーダーになる人が出てきます。そういう人をつくるためには、何かというと、「出る杭を増やそう」というカルチャーが非常に大事だと思います。若いときから、出る杭という人は必ずいますが、そういう人をつぶさないことが非常に大事なのではないかと思います。将来の日本は決して暗くはないと思いますが、そのための方策は、やはり日本人の価値観をもう少し変えなくてはいけないのではないかということで、私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

**祖父江** 黒川先生、どうも大変ありがとうございました

ました。非常に熱血あふるるお話を承ることができました。こういう学会で、先生のお話をじかにお聞きする。しかも先生の日ごろお考えになっている、いろいろな角度からご覧になっている、特に大所高所、あるいはグローバリゼーションというか、非常に高い立場からいろいろなことを眺めることによって、将来の見通しがついてくるのではないかと。先生のすぐれた先見性といえますか、これを非常に熱血あふるるスピーチの中で、我々は感ずることができたのではないかと思います。

こういう東洋医学会の将来というか、21世紀の展望というものについても、先生の今日のお話は、大変有益なお話ではなかったかと思うのでございます。

もう一度、先生のために大きな拍手をお送りしたいと思います。どうもありがとうございました。